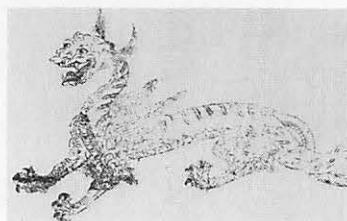


飛鳥資料館の研究展示・特別展示

飛鳥資料館

研究展示「高松塚壁画の新研究」 1992年は明日香村にある高松塚古墳で、極彩色の壁画が発見されて20年にあたる。そこで、これまであまり顧みることのなかった視点で、この壁画がどのような技法によって描かれたかについて研究を進め、その成果を中心にして、写真パネルを使って展示した。この研究は東海大学情報技術センターと共同でおこない、発掘時に撮影された壁画のカラー写真の画像処理をして、画面上の傷痕を除去したうえで画像解析により各図像を比較検討した。すると、男女群像では、人物の下絵を描いた幾つかの型紙が用意されていて、そ

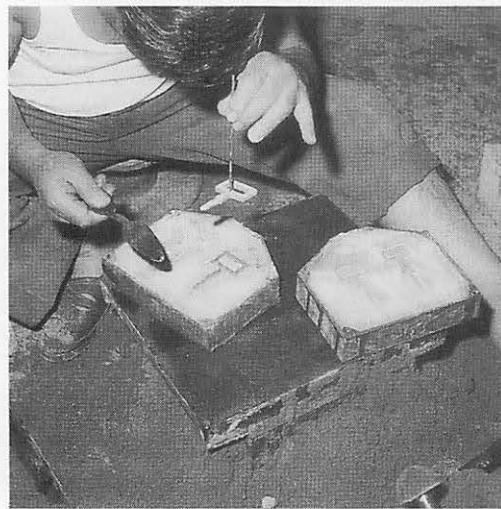


傷痕を除いた白虎図

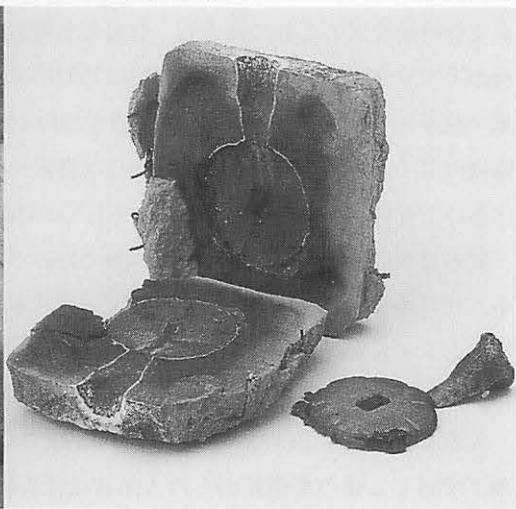
れを壁面上で操作して群像表現の下書きを作製した可能性が指摘されるようになった。また、東・西壁の青龍と白虎に関する部分ごとに図像が一致することにより、型紙による描画法がうかがえる。期間中の講演会で、星山晋也氏は、絵画にこのように型紙を使用する例は敦煌壁画や法隆寺金堂壁画、さらに尾形光琳の菖蒲図にも見られると紹介した。

特別展示「飛鳥の工房」 7世紀後半頃の鋳物、鍛冶、ガラス細工などの火を扱う工房で働いていた工人たちの作業を、出土品や現代工人の模作により、復原的に展示した。1991年の初夏に、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が飛鳥寺東南の丘陵谷間で発掘した赤く焼けた炉跡や小規模な掘立柱建物跡、廃棄物層は、豊富な出土品から、そこで金工品やガラス製品を作っていたことを教えてくれた。出土土器の年代から藤原宮の時代に盛んに煙をあげて操業していたこともわかった。これらの工房に関する諸道具や未製品などを展示し、また合わせて現代工人による製作過程やその諸技法を実物の道具や模作品、多数の写真パネルで解説展示した。

(工楽善通)



砂型を作る



鋳型とその銅金具